

1. 総括 ～初めての未修者受験の結果～

今年度の新司法試験は、2004 年に法科大学院に入学した「未修者コースの第 1 期生」及び 2005 年に入学した「既修者コースの第 2 期生」、前年で残念ながら不合格となった「既修者コースの第 1 期生」が受験しました。

その中でも、今年度は初めて未修者コース出身者が受験したこともあり、多様な人材を法曹として養成することを目的として創設された法科大学院の理念が、どれだけ反映されているかという点で注目される試験であったと思われます。

また、今年度は初の未修者コース出身者の受験年度であるため、法科大学院ごとの合格者実績のみならず、未修者・既修者ごとの合格実績等もデータとして出ています。受験校の決定に際しては、「どの法科大学院を受験するか」という点に加えて、「未修者・既修者のいずれで受験すべきか」という点もこうしたデータから判断すべきでしょう。

以下は、「入試全体について」「既修者コースについて」「未修者コースについて」と項目立て、それぞれについて「データ分析」と「対策」を記述しております。今後の入試対策にお役立ていただければ幸いです。

2. 入試全体について ～既修者と未修者の差は？～

(1) データ分析 ～合格率はどう出たか～

<データ① 2006 年度・2007 年度新司法試験合格率・合格者人数>

2007 年度 全体 合格率 (※)	2007 年度 既修者 合格率 (※)	2007 年度 未修者 合格率 (※)	2007 年度 合格者人数 (受験者数)
40.18%	46.03%	32.32%	1851 人 (4607 人)
2006 年度 全体 合格率 (※) (※平成 18 年度は既修者出身者のみ)		2006 年度合格者人数 (受験者数)	
48.35%		1009 人 (2087 人)	

※「合格率=合格者数÷受験者数」

原則として、本分析では、「合格率」とした場合、この計算によります。

まず、今年度の合格率は、昨年度の全体合格率 48.35%から、40.18%へと低下しています。上記のように今年度の新司法試験には、「未修者コースの第

1 期生」、「既修者コースの第 2 期生」も参加しており、全体合格者の人数も増加していますが、一方で受験母体の人数もそれ以上に増加しているのがこの原因と思われます。

次に、今年度は、未修者コースの受験生が初めて新司法試験を受験しましたが、既修者コース出身者との比較は注目すべき結果となっています。

今年度の新司法試験の最終合格率を見てみると、まず、顕著に差が現れたのは、既修者と未修者の合格率でしょう。既修者では既修者全体の 46.03%、未修者では未修者全体の 32.32%となっており、未修者には厳しい結果となったようです。

<データ② 出身学部別既修・未修合格率>

コース別出身学部	出願者数	合格者数	合格率 (※1)
①既修者法学部	2568 人	1096 人	42.68%
②既修者非法学部	317 人	120 人	37.86%
③未修者法学部	1354 人	343 人	25.34%
④未修者非法学部	1162 人	292 人	25.13%

※1 「合格率=合格者数÷出願者数」

法務省発表データが出願者数によるため、この表においては、上記計算で算出しています。

さらに、既修者・未修者の出身学部別合格率も踏まえて見てみると、既修者法学部卒は約 43%、既修者法学部以外卒は約 38%、未修者法学部卒は約 25%、未修者法学部以外卒は約 25%の合格率となっています。

特に注目すべきデータは、(1)「法学部」出身者に限って言えば、既修者と未修者の合格率に 18%もの差があること (①既修者法学部と③未修者法学部の比較)、及び(2)非法学部出身者であっても、既修者コースの受験生が約 38%の合格率を出していること (②既修者非法学部) でしょう。

この 2 点から分析できることは、出身学部を問わず、既修者コース入試対策として法律の勉強をすることが、新司法試験に対しても効果があるということです。

実際のところ、法科大学院入学後は授業の予習・復習に時間を割く必要があり、新司法試験対策をする時間は限られてきます。新司法試験に必要な「底力」は、法科大学院入試での法律科目対策あるいは旧司法試験対策により培われていると言っても過言ではないでしょう。

(2) 全体的な入試対策

このように、新司法試験において未修者に厳しい結果が出ていることから考えると、法科大学院の受験に際しては、法学部卒の方のみならず、他学部卒(社会人を含む)の方も入学前に法律を学習し、既修者として入学することが、新司法試験合格への近道であるといえるでしょう。

3. 既修者コースについて ～2年分の結果から～

(1) データ分析① ～既修者コース合格率・合格者数ベスト10～

<データ③ 2006年度・2007年度 既修者合格率ベスト10>

2006年	
①島根大学	100%
②一橋大学	83.02%
③愛知大学	72.22%
④東京大学	70.59%
⑤北海道大学	70.27%
⑥大阪市立大学	69.23%
⑦京都大学	67.44%
⑧神戸大学	64.52%
⑨慶應義塾大学	63.41%
⑩早稲田大学	63.16%

2007年	
①大阪学院大学	100%
①金沢大学	100%
①獨協大学	100%
④名古屋大学	75.00%
⑤京都大学	69.41%
⑥大阪大学	68.75%
⑦國學院大学	66.67%
⑦南山大学	66.67%
⑦広島修道大学	66.67%
⑦福岡大学	66.67%

<データ④ 2006年度・2007年度 既修者合格者数ベスト10>

2006年	
①中央大学	131人
②東京大学	120人
③慶應義塾大学	104人
④京都大学	87人
⑤一橋大学	44人
⑥明治大学	43人
⑦神戸大学	40人
⑧同志社大学	35人
⑨関西学院大学	28人
⑩立命館大学	27人

2007年	
①東京大学	140人
②中央大学	134人
③慶應義塾大学	132人
④京都大学	118人
⑤明治大学	61人
⑥立命館大学	59人
⑦一橋大学	44人
⑧神戸大学	39人
⑨東北大学	34人
⑩上智大学	31人

注 太字・下線は、各年度において合格率・合格者数ともにベスト 10 入りしたロースクールである。

2006 年度入試、2007 年度入試既修者のみの合格率ベスト 10、合格人数ベスト 10 を挙げると、上記のようなデータになります。

本年度の新司法試験受験者は、当然のことながら、第 1 回の新司法試験が実施される前（初回実施は 2006 年）に入学をしています。当時の入試状況は、国公立および知名度の高い大学院について人気が高く、入学倍率も高くなっていました。

この理由としては、①国公立大学院の学費は私立大学院に比較して安いこと、②制度自体が定着していない段階ということで、安心感を求めるべく、知名度の高い大学院が選ばれたことにありました。

今年度の新司法の結果は入試状況をそのまま反映したものと考えることができます。つまり、上記の大学はいずれも人気が高い大学であり、入学者は旧司法試験受験経験のあるような実力者が多かったと考えられます。その関係により、いわゆる「有名校」については、合格率のみならず合格者人数でも良い結果を残していると考えられるのです。

(2) データ分析② ～安定した成績を残している大学院は～

<データ⑤ 2年間ともに既修者合格率が 60%を超え、かつ 10 名以上の合格者を輩出する大学院>

既修者合格率	2006 度合格率	2007 度合格率
東京大学	70.59%	62.22%
早稲田大学	63.16%	64.71%
慶応義塾大学	63.41%	65.02%
一橋大学	83.02%	60.27%
京都大学	67.44%	69.41%
名古屋大学	60.71%	75.00%

初年度に開校した各法科大学院が全て合格者を輩出している状況となっていますが、その中でも、2 年連続で「既修者合格率が 60%以上」かつ「合格者 10 名以上」の法科大学院としては、東京大学、早稲田大学、慶應義塾大学、一橋大学、京都大学、及び名古屋大学の 6 校があります。

このような国立大学及び一流私立大学において合格実績が高くなっていることは、そのような大学院には優秀な学生が集まっており、切磋琢磨する中で実力が伸びることにも起因すると思われます。

(3) 既修者コース入試対策 ～法律科目試験の高レベルな戦い～

上記データ⑤の大学院の既修者コースに進めば、計算上、都合 2 年間で約 8 割の学生が合格できることとなります（毎年合格率を 60% とすると、不合格率は 40% となり、2 年連続で不合格となる確率は $0.4 \times 0.4 = 0.16$ 、即ち 16% となります。すると、2 年間で合格できる確率は 84% となります。）。今後の新司法試験を考えた場合、やはりこのような法科大学院に進学することが、得策といえるでしょう。

ただし、このような大学院の入試では、適性試験の高得点が必須になることに加えて、法律科目試験の難易度も高く、十分な法律科目試験対策も必要になってきます。

例えば、東京大学の法律科目の試験は特徴のある形式となっており、旧司法試験レベルの知識があること前提に、出題形式に合わせてそれを表現できることが必須である問題となっています。また、その他の大学でも、やはり知識レベルは旧司法試験なみであり、加えて、名古屋大学の 200 字問題（特定の定義・テーマについて 200 字内で論述させる問題）、慶應義塾大学の簡易記述式問題など、出題形式に特徴のある出題がされています。

このような法科大学院に進学するためには旧司法試験レベルの知識を習得するに加えて、その独特の出題形式に即した学習をする必要があります。

また、入試形態としては内部振り分け形式を採用する早稲田大学では、入学決定後に受験する既修者認定試験は難易度が高いといわれています。

このような法科大学院では、既修者コースに進むために、しっかりとした法律の「底力」を身に付けておく必要があるわけです。

4. 未修者コースについて ～明暗を分けたポイントは～

(1) データ分析 ～ 既修者コースの影響あり? ～

<データ⑥ 2007 年度 未修者合格率・合格者数ベスト 10>

合格率	
①千葉大学	88.89%
②一橋大学	<u>73.91%</u>
③慶應義塾大学	<u>60.29%</u>
④名古屋大学	<u>54.05%</u>
⑤早稲田大学	<u>50.49%</u>
⑥北海道大学	<u>48.65%</u>
⑦東京大学	<u>48.10%</u>
⑧同志社大学	<u>45.95%</u>
⑨東北大学	44.83%
⑩岡山大学	44.44%

合格者数	
①早稲田大学	<u>104 人</u>
②慶應義塾大学	<u>41 人</u>
③東京大学	<u>38 人</u>
④九州大学	24 人
⑤大阪大学	21 人
⑥名古屋大学	<u>20 人</u>
⑦中央大学	19 人
⑦明治大学	19 人
⑨北海道大学	<u>18 人</u>
⑩京都大学	17 人
⑩同志社大学	<u>17 人</u>
⑩一橋大学	<u>17 人</u>

注 太字・下線は、合格率・合格者数ともにベスト 10 入りしたロースクールである。

<データ⑦ 未修者合格率・合格人数双方のベスト 10 に入る大学院の「既修者合格率」>

	「既修者」合格率
一橋大学	60.27%
<u>慶應義塾大学</u>	65.02%
名古屋大学	75.00%
早稲田大学	64.71%
東京大学	62.22%
北海道大学	49.18%
同志社大学	32.26%

未修者のみの合格率ベスト 10、合格人数ベスト 10 を挙げると、上記データ⑥のようなデータとなります。

未修者コースの特徴は、全体的に合格率のばらつきが大きいことにあります。この原因については、①各ロースクールの新司法試験対策方針の違いが影響した、あるいは、②いわゆる「隠れ既修」といわれる未修者コースにいながらも旧司法試験受験暦のあるような受験生の存在が影響した、③国公立や有名私大の法科大学院の学生には優秀でポテンシャルが高い人間が多いなど、様々なものが考えられます。

ただ、未修者合格率・合格人数双方のベスト 10 に入る大学院の「既修者」の合格率をみると、ほとんどの法科大学院は 50%以上を確保しているところばかりです。このことから、「未修者」の合格率・人数が多い法科大学院は、「既修者」にも優秀な学生が多く、人的な学習環境が整っていたということが出来ます。例えば、これら「既修者」出身の学生と「未修者」出身の学生が自主ゼミを組むことなどにより、「未修者」の学生も、良質な環境で学習できたと推測できるというわけです。このような環境についても志望校の選択については、考慮にいれるべきでしょう。

(2) 未修者コース入試対策 ～適性試験とのつながりは？～

既修者コースでは、法律科目の配点が大きく、適性試験での多少の失敗は許されるといわれていますが、未修者コースでは適性試験への配点が大きいので、これが不可能です。その中でも人気の高い法科大学院に合格するには適性試験の高得点が必要となります。

実際に、抜群の合格率となった千葉大学、一橋大学では 2004 年度入学選抜の時点で適性試験の点数が高い方が入学しています。

例えば、2004 年入試において、千葉大学では、未修者の出願条件として適性試験 74 点以上（大学入試センター主催）が求められていました。また、一橋大学では、未修者コース合格者の最低点が 78 点（大学入試センター主催）となっていました。同年の大学入試センター主催・適性試験の平均点が 63.07 点であったことからすると、適性試験での高得点が求められていたのがお分かりいただけると思います。

上記のような入試結果と今回の新司法試験結果を踏まえると、はっきりとしたことは言えませんが、適性試験で高得点を取る力が新司法試験の合格に結びつく可能性も考えられます。

以上